JA静岡経済連

経済連情報 12

安全・安心・新鮮でおいしい
静岡県産の農畜産物をお届けします。

2024. 12
NO.1323

「物流の2024年問題」への対応と農産物の効率的な輸送体系の確立について

▲「いい夫婦の日」にちなみ県知事に花束を贈呈

▲名古屋市中央卸売市場で試食宣伝会を開催

Main topics
「物流の2024年問題」への対応と
農産物の効率的な輸送体系の確立について …01

topics&news
産地と市場の連携による販売力強化
令和6年度系統経済事業研究委員会・流通懇談会…03
「静岡いちご」の輸出拡大へ
静岡いちご輸出産地セミナーを開催 ……03
本会ブランドをPR
お肉の日畜産フェアで県産畜産物を販売…04
新品種導入を検討
令和6年度静岡県花卉連ばら部会品種検討会 …04
いい夫婦の日に花を贈ろう
県知事に花束を贈呈 ……04
6府県のブランド牛が揃う
第71回近畿東海北陸連合肉牛共進会 …05
本会ブランドの品質向上へ
第36回特選和牛静岡そだち枝肉共励会 …05
中堅職員のスキルアップへ
農機事業幹部候補育成研修を開催 ……05
団体の部で静岡Aが優勝
第41回全国茶生産青年茶審査技術競技会 …06
旬の県産農産物をPR
名古屋市中央卸売市場で試食宣伝会を開催…06

最新研究紹介
樹高を下げて省力的に栽培できるヒュウガナツのカットバック処理 07

お知らせ
テレビ番組「しずおかごはんが食べたい!」のご紹介 …09
JAタウン しずおか「手しお屋」おすすめ商品のご紹介 09
肥料農薬レポート ……10

main topics
メイントピックス

「物流の2024年問題」への対応と農産物の効率的な輸送体系の確立について

Ⅰ はじめに

わが国では、「働き方改革関連法」の施行により、令和6年4月1日以降、トラック運転手の時間外労働960時間の上限が適用され「物流の2024年問題」に直面しています。トラック運転手の労働環境改善を図る一方で、運転手の不足、輸送コストの上昇やそれに伴う商品価格の上昇、配送遅延などの課題が懸念されています。

農業現場においても、物流は農産物の収穫や出荷と密接に関係し、出荷遅延による品質低下や農産物価格への影響が懸念されるなど、重要な課題として認識されています。物流の適正化・生産性向上について対策を講じなければ、令和6年度中に輸送能力が約14％不足し、このまま推移した場合、令和12年度（2030年度）には、約34％不足すると推計され（出典：持続可能な物流の実現に向けた検討会中間とりまとめ（2023年2月））JAグループとしても早急な対応が求められています。

今回のメイントピックスでは、「物流の2024年問題」への本会の対応と農産物の効率的な輸送体系の確立に向けた取組みについて詳しくご紹介します。

Ⅱ 物流2024年問題への対応

経済産業省、農林水産省、国土交通省は令和5年6月に「物流の適正化・生産性向上に向けた荷主事業者・物流事業者の取組に関するガイドライン」を策定し、早急に取り組むべき事項を示しました。

本会では、このガイドラインに示す事項を実践するため、JA支援課で取組みに対するフォローアップ調査を実施。各部署における対応状況の取りまとめと共有により、多岐に渡る輸送の合理化を進め、事業改善を実行していきます。

本会の対応状況については表1のとおり。

表1. JA静岡経済連の対応状況

	取組み内容	部署の取組み例
1	荷待時間・荷役作業等にかかる時間の把握	精米工場では運送受付簿に到着、荷積み荷卸しの開始、終了時間を記録
2	荷待ち・荷役作業等時間2時間以内ルール	新設選果場での11パレットの導入推進 肥料輸送で導入済み ２時間以内を確認している（食糧）
3	物流統括管理者の選定	「特定事業者」の基準について調整中
4	物流の改善提案と協力	定期的（年1回以上）物流事業者との協議を開催している（総合エネルギー・生活葬祭・食糧）
5	運送契約の書面化	全部署で契約書による締結
6	荷役作業等に係る対価	梱包作業料金等、発生する付帯作業には作業料の支払い（生活葬祭・食糧）
7	運賃と料金の別建て契約	運送契約とは別に「業務委託契約書」（積み込み作業・市場作業）を設定（食肉）
8	燃料サーチャージの導入 燃料費等の上昇分の価格への反映	燃料価格上昇による運送事業者の運賃値上げ交渉に対応している（総合エネルギー、食糧）
9	下請け取引の適正化	ほとんどの部署で多重下請けは無い事を確認
10	異常気象時等の運行の中止・中断等	全部署で運送会社の指示に従い実施している

Ⅲ 農産物の効率的な輸送体系の確立

1. レタスの直送輸送

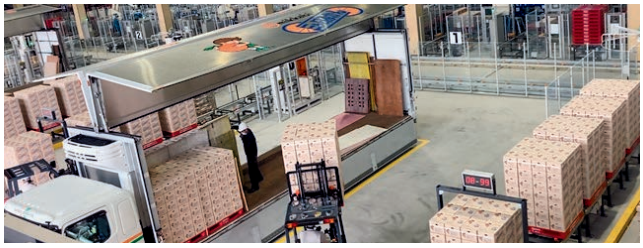
みかん園芸部では、秋冬期の主力品目であるレタスの効率的な輸送体系を構築しました。西日本のレタス主産地と比べ、首都圏との距離が近い本県の利点を生かし、卸売市場へ運ぶトラックとは別に取引先スーパーの物流センターに直接輸送するルートを組み立てました。

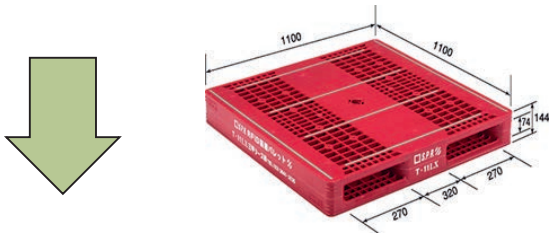
取組みは、令和2年度に改正卸売市場法が施行され、取引先市場を介さずに実需者へ直送する「商物分離」の規制が緩和されたことを受け、同年産から週3日のペースで輸送を開始。令和3年度からは、1日のレタス供給量のうち、5～10％程度を占めています。直接輸送による荷下ろし箇所数・輸送時間の削減を実践しています。通常出荷と比べ、店頭に並ぶまでの時間を半日以上短縮できることから、鮮度の良さを訴求し、量販店での取り扱い拡大につなげることも狙いのひとつです。

▲首都圏量販店で販売される静岡レタス

2. レンタルパレットの導入

JAみっかびでは、農林水産省が推奨するT-11型のレンタルパレットを導入した出荷が始まっています。サイズ・仕様を統一したパレットを共同利用することで、市場内物流の効率化、荷待ち・荷役作業時間の短縮を図ります。また、段ボール等の出荷資材についても輸送効率向上に向けた対応を進めています。



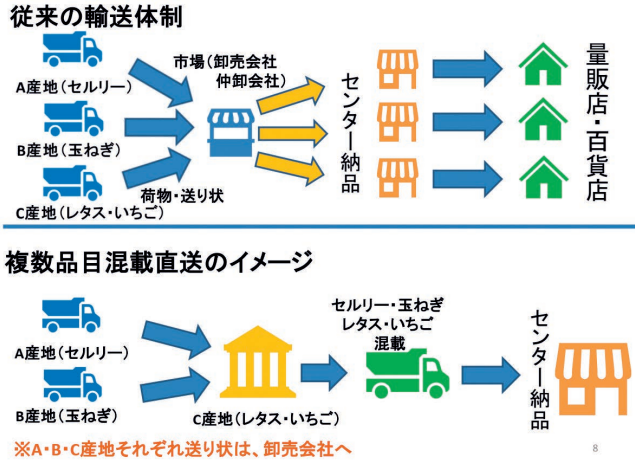


▲T-11型パレットを使用した出荷（JAみっかび柑橘選果場）

3. 複数品目混載直送の導入検討

1台のトラックに複数品目を混載し、積載率を高めて納品する輸送方法についても検討・導入を進めています(図1)。各産地でそれぞれの品目ごとにトラックを手配し、卸売市場へ輸送する従来の輸送体制に対して、コストの削減と輸送効率の向上を図ります。

図1．効率的な農産物輸送体制（イメージ）



Ⅳ おわりに

今回のメイントピックスでは、「物流の2024年問題」への対応状況と農産物の効率的な輸送体系の確立に向けた取組みについてご紹介しました。

本会は、パートナー市場や物流事業者、取引先との連携をより一層強化し、引き続き物流の効率化・合理化に取り組んでまいります。

問い合わせ先

● 担当：営農総合対策部　JA支援課
電話：054-284-9709

産地と市場の連携による販売力強化

令和6年度系統経済事業研究委員会・流通懇談会

みかん園芸部と企画管理課は11月12日、静岡市内で「令和6年度系統経済事業研究委員会・流通懇談会」を開き、県、JA、卸売会社から関係者ら約50人が出席しました。主要取引先とのパートナーシップの構築による販売力強化を図り、県産農産物の品質の良さを発信して消費拡大と農家所得の向上につなげる目的。

懇談会では、みかん園芸部が、青果・柑橘（かんきつ）・花きの秋冬期出荷計画と販売戦略を共有。資材高騰や気候の変化、後継者不足に伴う生産量の確保を課題に挙げ、効果的な消費宣伝などの販売促進と、マーケットインによる品目提案などの生産振興の取組を報告しました。また、産地からの要望として、卸売会社へ生産コストの販売価格への反映を求め、卸売会社は「栽培環境は厳しいが、安定出荷に期待している。市場でも農家の所得確保のため販売価格を引き上げる努力をしていく」と応えました。

挨拶した石川和弘代表理事理事長は「県産農産物の出荷が本格化する秋冬期に向け、県、JA、卸売会社が一体となって、農業を取り巻く課題に対応し、有利販売と生産者の所得向上につなげていく」と話しました。

▲挨拶する石川理事長

▲出荷計画を確認する関係者ら

「静岡いちご」の輸出拡大へ

静岡いちご輸出産地セミナーを開催

流通開発課は10月30日、県農業会館で「静岡いちご輸出産地セミナー」を開き、生産者や県内JA、県、卸売会社などの関係者28人が参加しました。本格的なイチゴの出荷期を前に、産地との情報共有や意見交換を通じて、輸出事業の強化と生産基盤の維持・拡大につなげる狙い。

セミナーでは、本会、JA全農、県、卸売会社の静岡VFがそれぞれ輸出戦略や販売実績、規制への対応などを報告しました。

同課の担当者は「県産イチゴの輸出は拡大傾向で、令和5年度は前年比2倍強の売上。現地の日系スーパーでのフェア開催による販売先の確保や香港でスイーツ材料などの業務用規格の需要が高まり、販売拡大につながった。価格についても1月以降は国内平均単価より＋100円／pkほど優位性がみられた。」と説明。一方で課題については、JA全農輸出対策部より「主要な輸出先国へは市場取引の青果物も輸出され、価格競争の激化や残留農薬の規制に適応できないケースが増えている」と報告しました。

本会は今年、農水省が新設した制度で、農畜産物の輸出をけん引する「フラッグシップ輸出産地」に、イチゴ産地として認定されました。今後はJA、行政、産地が一体となって海外のニーズや規制に対応する農産物づくりをすすめ、県産イチゴの輸出拡大を目指します。

▲輸出事業の取組みについて説明を受ける参加者ら

本会ブランドをPR

お肉の日畜産フェアで県産畜産物を販売

小笠食肉センターは10月27日、菊川市のおがさセントラルパークで行われた「お肉の日畜産フェア」に参加しました。

フェアは県畜産振興課が主催し、県産農畜産物のPRと同センターを活かした地域振興を目的に例年開催しています。当日は畜産物の販売や試食配布、クイズラリーなどのイベントが行われ、約9千人の来場客で賑わいました。

本会のブースでは、「金豚王」のウインナーや「特選和牛静岡そだち」を使った加工品を販売しました。

▲本会の出展ブース

新品種導入を検討

令和6年度静岡県花卉連ばら部会品種検討会

静岡県花卉園芸組合連合会ばら部会（事務局：野菜花卉課）は10月24日、県農業会館で、「令和6年度静岡県花卉連ばら品種検討会」を開き、県内6JAのバラ生産者とJA担当者、市場関係者ら約40人が出席しました。

品種検討会では、国内の種苗メーカー4社（京成バラ園芸㈱、国枝バラ園㈱、イノチオ精興園㈱、㈱ROSETIQUE JAPAN）が、今年販売される新品種を中心に魅力や特徴などを説明しました。㈱大田花きの担当者からは、出荷に期待する品種をピックアップし、生産者と情報共有を図りました。

▲新品種の説明を受ける生産者ら

いい夫婦の日に花を贈ろう

県知事に花束を贈呈

静岡県花卉園芸組合連合会（事務局：野菜花卉課）と花咲くしずおかフラワーネットワーク会議は11月5日、静岡市葵区の県庁を訪れ、県産のバラやガーベラ、カーネーションなどの花束を鈴木康友知事と増井浩二副知事に贈呈しました。11月22日の「いい夫婦の日」に合わせて花き生産者と生花商組合などが連携し、例年県産花きの消費拡大をPRしています。

花束を贈呈した同連合会の生産者らは「夏の猛暑により各品目で年々難しい栽培環境なっている」と話し、生育状況などを報告しました。鈴木知事は「県でも高温対策や新品種の研究などをすすめている。生産者を支えられるよう技術面でも協力していきたい」と応えました。

6府県のブランド牛が揃う

第71回近畿東海北陸連合肉牛共進会

近畿東海北陸肉牛協会は11月10日、神戸市中央卸売市場西部市場で肉牛共進会を開き、6府県（京都、滋賀、静岡、三重、岐阜、兵庫）から雌牛と去勢牛の2部門に計100頭が出品されました。最優秀賞は、雌牛の部で滋賀県の近江谷口牧場㈱、去勢牛の部で京都府の㈲京都丹波牧場が受賞しました。

本県からは、雌牛10頭、去勢牛3頭が出品され、雌牛の部でJA掛川市の堀内慎也さんが優秀賞1席、去勢牛の部でJA遠州中央の野島泰雄さんが優秀賞2席に輝きました。

その他の県内からの入賞者は次のとおり（敬称略）

▲出品された枝肉の品質を確認する関係者

第1部（雌）

- **優秀賞1席**
  堀内　慎也（JA掛川市）
- **優良賞1席**
  ㈲渡邊（JAみっかび）
- **優良賞3席**
  武友　沙千子（JA遠州中央）
- **優良賞4席**
  大井　寿生（JA大井川）
- **優良賞5席**
  ㈱すずき牧場（JA遠州夢咲）

第2部（去勢）

- **優秀賞2席**
  野島　泰雄（JA遠州中央）
- **優良賞5席**
  杉浦　浩務（JA遠州夢咲）

本会ブランドの品質向上へ

第36回特選和牛静岡そだち枝肉共励会

特選和牛静岡そだち認定農場の会（事務局：経済連畜産センター）は11月11日、浜松市食肉地方卸売市場で「第36回特選和牛静岡そだち枝肉共励会」を開き、本会ブランド「特選和牛静岡そだち」の黒毛和種雌15点が出品されました。

審査の結果、JAみっかびの尾藤和彦さんが最優秀賞に選ばれました。審査した日本枝肉格付協会浜松事業所の石川悠未所長は「最優秀賞の枝肉は肉の光沢・締まり・きめともに良質で、副芯・カブリ・ばらの脂肪交雑も細かく十分だった。」と講評しました。

その他の受賞者は次のとおり（敬称略）

最優秀賞

- 尾藤　和彦（JAみっかび）

優秀賞

- 菅本　徹（JAとぴあ浜松）
- 武友　沙千子（JA遠州中央）

▲検品のようす

中堅職員のスキルアップへ

農機事業幹部候補育成研修を開催

農業機械課・JA支援課は11月1日、菊川市の県農業研修会館で「農機事業幹部候補育成研修」を開き、県内5JAの担当職員ら18人が参加しました。

研修では、JAの農機センターを支える役職者の役割や問題解決の技法、コミュニケーション力と効果的な報告スキルの向上について、グループワークや講義を行いました。

参加者は「役職での立場や役割を再認識することができた。自分が中心となって上司や部下と積極的にコミュニケーションを取り、職場のチームワークを高めたい」と話しました。

▲講義を受ける参加者

団体の部で静岡Aが優勝
第41回全国茶生産青年茶審査技術競技会

全国茶生産青年団は1日、静岡市葵区の静岡茶市場で「第41回茶生産青年茶審査技術競技会」を開きました。13府県の県大会を通過した代表98人が参加し、茶の鑑定審査技術を競いました。

1チーム5人の総合得点で順位を決める団体の部は本県から3チームが参加し、競技の結果、静岡Aチーム（原間信太郎さん、森島康博さん、中小路勝洋さん、井川健二さん、松井天馬さん）が優勝、静岡Bチーム（松下公彦さん、丸尾友基さん、杉山大智さん、松浦永治さん、藤中康彦さん）が準優勝に輝きました。

個人の部は京都府の小島康稔さんが優勝、本県の松下公彦さん（JA遠州中央）が準優勝、原間信太郎さん（JAハイナン）が3位となりました。

団体の部で優勝、個人の部で3位に入賞した原間さんは「チーム全員で力を合わせて団体優勝ができ、うれしい。次回は個人、団体ともに優勝を目指して頑張りたい」と話しました。

▲▼競技に挑んだ各府県の代表ら

旬の県産農産物をPR
名古屋市中央卸売市場で試食宣伝会を開催

名古屋事務所は11月14日、名古屋市中央卸売市場北部市場で県産農産物の試食宣伝会を開きました。市場関係者へ旬を迎えるセルリーと自然薯の食べ方をPRし、県外での取り扱い拡大につなげる狙い。この日は、JAとぴあ浜松産のセルリーを使った「温サラダ」とJA静岡市産の自然薯を使ったとろろ汁・むかご唐揚げを提供。「温サラダ」は、調味料メーカーの理研ビタミンとコラボし、同社商品のドレッシングを使用しました。

同事務所はこれまでにも新タマネギや馬鈴薯などで県産農産物のコラボレシピを開発。SNSでのレシピ動画配信や量販店での販促で活用し、消費者へPRしています。経済連の担当者は「静岡県はセルリーと自然薯のブランド力のある産地。今後の増量時期に向け、買参人や量販店バイヤーへの訴求を通じて、認知、売り場、消費の拡大に繋げたい」と話しました。

▲セルリーのコラボレシピを振る舞う関係者

▲市場関係者で賑わう試食宣伝コーナー

最新研究紹介

農林技術研究所だより

樹高を下げて省力的に栽培できる ヒュウガナツのカットバック処理

私が紹介します！

静岡県農林技術研究所
伊豆農業研究センター生育・加工技術科
上席研究員
浜部　直哉

一　はじめに

ヒュウガナツ（図1左）は、ニューサマーオレンジという名称で販売される静岡県伊豆地域の特産カンキツです。伊豆地域におけるヒュウガナツの栽培は、大正9年頃に開始されたといわれており、100年以上の歴史があります。古くからヒュウガナツを栽培する伊豆の産地には、樹齢40年生以上で樹高5mを超える大木がみられ、作業性が悪化することから問題となっています（図1右）。

そこで、伊豆農業研究センターでは、これらの大木を樹高が低く管理しやすい樹に再生し、作業性の改善が図れる「カットバック処理」について技術開発を行いました。なお、特段の技術やノウハウが必要なわけではなく、チェーンソーがあれば誰でも実施できるのがカットバック処理の特徴です。

図1　ヒュウガナツの果実（左）と大木化したヒュウガナツ樹（右）

二　カットバック処理の方法

チェーンソーを用い、地上50～60cm程度の高さで、地上部を全て切除します。その際に、主枝の基部を5cm以上残すようにします（図2）。主幹部一カ所で切るのではなく、主枝の基部を少し残して切る理由は、新梢が発芽する箇所の表面積を少しでも大きく確保するためです。切除後は切り口の腐敗を予防するため、切り口の全面を覆うようにゆ合剤を塗布します。カットバック処理が可能な時期は3月から5月で、処理時期が3月であっても、5月であっても、その後の生育に差はないことをこれまでに確認しています。一般的なカンキツ類の剪定時期は発芽前の3月であることから、剪定と同様に枝を切除するカットバック処理も3月が適期と考えられますが、ヒュウガナツの収穫時期は4月から5月であるため、3月にカットバック処理する場合、カットバック処理前の樹に着果している果実は本来の収穫期よりも早い3月に収穫する必要があります。ヒュウガナツの本来の収穫期である5月に果実を収穫したい場合は、カットバック処理は収穫後の5月に行うことになります。

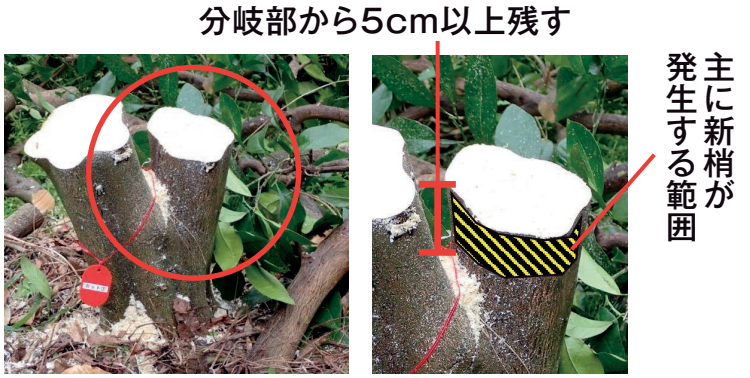


図2　カットバック処理時の主枝の切除位置

三 カットバック処理後の樹体生育

樹高5.1mの大木を令和2年5月にカットバック処理したところ（図3）、処理1年後の令和3年3月には樹高1.6m、樹幅1.4mまで樹が再生し、その年の春（令和3年5月）には着蕾がみられました。この蕾が落下せずに結実したことから、収穫が開始できるのはカットバック処理から2年後（令和4年5月）であることがわかりました。すなわち、収穫物が得られない未収益期間は、枝の伸長による樹体の再生を行う必要がある1年間のみであることが明らかとなりました。また、処理2年後には樹高2.1m、樹幅2.0mとなり、目標としていた高さ2mまで樹が再生したことから、カットバック処理後は樹の成長が早いことも示されました。なお、処理3年後には樹高2.6m、樹幅2.3mとなることから、樹高を低く維持するための剪定が必要となります。

四 作業性改善効果と収量

カットバック処理した樹と処理しなかった大木で、収穫作業の時間を比較しました（図4）。純粋な作業性を比較するため、果実1kgを収穫するのに要した時間に換算して比較を行ったところ、カットバック処理

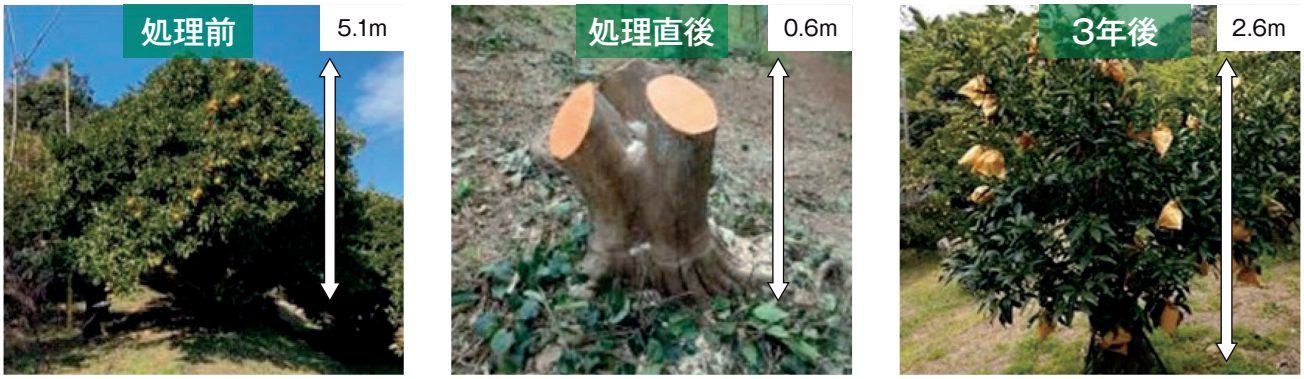


図3 カットバック処理前後におけるヒュウガナツの樹姿

樹の収穫時間は、カットバック処理しない大木に比べて約4割削減できるということがわかりました。樹上または脚立を利用した収穫が大半であった大木での作業に比べて、カットバック処理後の樹は地上からすべての果実を収穫できたため、効率的に作業できたことが収穫時間の短縮に繋がったと考えられます。また、樹に登ることなく地上ですべての果実を収穫できるようになったことは、農作業の安全性という点からも大きなメリットであると考えられます。

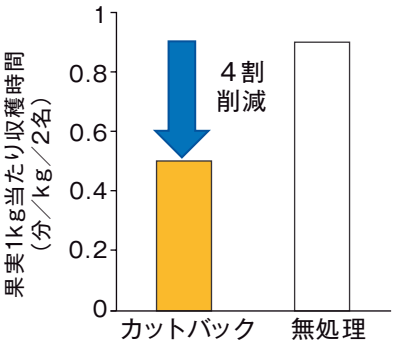


図4 カットバック処理による収穫時間の削減

前述のとおり、カットバック処理から1年間は枝を伸ばすだけになるため、処理1年後は収量が得られませんが、2年後以降は樹の再生に伴い少しずつ収量が回復します。カットバック処理から2年後には1樹当たり3.1kg、3年後には6.5kgの収量が得られました。樹が老齢になった園地の再生の方法としては、新しい苗木への改植が一般的です。しかし、苗木を定植した場合には樹が大きくなるまでに時間を要することから、1年生の苗木を定植すると、少なくとも定植から2年間は収量が得られない期間があります。カットバック処理のメリットは、樹が早く大きくなることから収量の増加も早い点であると考えられました。

おわりに

カットバック処理後の樹はコンパクトな樹形となり、収穫作業時間だけでなく、摘果や剪定、農薬の散布に要する時間なども削減できると考えられるため、カンキツの年間を通した栽培管理において作業性改善に有効と考えられます。現状で報告できる試験成果はヒュウガナツのみですが、現在、その他のカンキツ品種でも同様にカットバック処理が可能かを検証する試験を実施中であるため、新たな研究成果は別途報告させて頂きます。

賀茂郡東伊豆町稲取3012
静岡県農林技術研究所　伊豆農業研究センター　生育・加工技術科
agriizu@pref.shizuoka.lg.jp
TEL：0557-95-2341

テレビ番組

「しずおかごはんが食べたい！」（テレビ静岡）

担当：食糧部 食糧課（TEL:054-284-9737）

静岡県産米麦流通連絡協議会（事務局：食糧部）は、テレビ番組「しずおかごはんが食べたい！」（テレビ静岡・全１１回放送）に協賛し、県産米のＰＲを行っています。

令和６年度の第７回目（11月16日）の放送では、お笑い芸人のモグライダーが御殿場市からごてんばこしひかり「このはなの恵み」の新米を紹介しました。「このはなの恵み」は、同JA管内の御殿場市・小山町で栽培されるごてんばこしひかりのトップブランド米で、香り高く優しい甘みが特徴です。

番組では、JAふじ伊豆御殿場営農経済センター地区営農課の勝又厚さんがビデオメッセージで出演し、「このはなの恵み」の美味しさをPRしました。

JAタウン しずおか「手しお屋」おすすめ商品のご紹介

今月のおすすめ商品をご紹介します！

2.5kg **3,600円**
（税込、配送料込み）

※販売価格や販売時期は変更する場合があります。

おいしい日本と暮らそう JAタウン

【紅はるか】「三島甘藷（みしまかんしょ）」2.5kg化粧箱（JAふじ伊豆）

三島市佐野地区で栽培される「三島甘藷」。最近流行の"ねっとり"したさつまいもがお好きな方にオススメの「紅はるか」です！

おいしい食べ方は定番の焼き芋。よく洗い、アルミホイルで包み、オーブントースターで30~40分ほどかけてじっくり焼けば完成です。簡単に美味しい焼き芋が作れるのでぜひ一度お試しください！

また、2.5kg規格は、１本１本ベテラン職員が目で確かめて、一箱ずつ丁寧に手で箱詰めいたします！「三島甘藷オリジナルＢＯＸ」にてお届けしますので、贈答用にもおすすめです。是非ご賞味ください！

しずおか手しお屋 検索

◀商品ページはこちらから

担当：営業部 流通開発課（TEL:054-284-9728）

肥料農薬レポート vol.1

魚粕原料確保への取組

有機質肥料について

肥料には、鉱物由来や化学的に製造される無機質肥料と植物や動物など有機物由来の有機質肥料があります。有機質肥料は土づくり効果も期待でき、持続可能な農業生産にとって有効な肥料です。本県は、県内に搾油工場や水産加工場など有機質肥料の原料が発生する工場があり、以前から多くの有機質肥料を利用してきました。

本会では、国内で発生する有機質肥料に限らず、海外からの原料調達も含め様々な有機質肥料の仕入を行い、単肥や配合肥料原料として使用しています。

魚粕原料の状況

本県では、古くから焼津港と清水港で水揚げされるカツオ・マグロの水産加工場から出る魚の加工残渣を魚粕として肥料に利用しています。しかし、近年は全国的に水産加工から発生する残渣が減少しており、肥料用途よりも高価格で販売できる飼料用途の製造量が増えています。現在、国内発生だけでは肥料需要を確保できないため、本会では、魚粕原料の一部を海外から輸入しています。

本会の魚粕原料の主な輸入先はインドネシアです。今回は、インドネシア国内にいくつかある仕入先のうち、一番の数量を輸入している仕入先を訪問した際の現地の状況や商談の様子について報告します。

インドネシア魚粕

インドネシアは、日本と同じ島国のため漁業が重要な産業に位置づけられています。現在世界4位の人口を誇り、経済発展の中で、漁業、水産加工業から肥料用途の魚粕が発生しています。

▲原料となる魚の水揚げ

生産状況

インドネシア国内でも、エビ養殖などの飼料に魚粕の需要があります。しかし肥料には利用されておらず、肥料用魚粕は日本への輸出のためだけに生産されています。

製造は、天日干しで乾燥された魚粕原料を工場にて粉砕し、フレキシブルコンテナに充填され、計量後にコンテナで日本に出荷されています。

▲魚粕を天日干しにして乾燥させる作業

視察内容

生産工場を訪問し、現地で原料の品質確認を行いました。工場では、入荷した原料の乾燥状態など品質チェックと最終調整を行います。入荷時の品質確認は継続して行われ、安定した品質が維持されていました。

▲品質確認のようす

現地工場担当者と現物を見ながら乾燥状態などの品質を確認し、今後も安定した品質での継続供給を依頼しました。また、新たな取組として、肥料成分・形状を変更した新規原料の検討についても協議を行いました。

まとめ

インドネシアの肥料用魚粕は、輸出のためだけに生産しているため、現地メーカーは販売面での不安をかかえていました。実際に訪問し、安定供給の依頼を行い、信頼を得ることができ、今後も高品質の魚粕原料を有利に仕入れるための関係作りを強化できました。本会は、これからも安定的な原料の確保に努めてまいります。

担当：生産資材部　肥料農薬課
電話：054-284-9723

JA静岡経済連 経済連情報
毎月1回発行　編集発行／企画　管理課 〒422-8620 静岡県経済農業協同組合　連合会 静岡県静岡市駿河区曲金3丁目8番1号
TEL.054(284)9708 FAX.054(284)9780 http://jashizuoka-keizairen.net E-mail:keizairen@kei.ja-shizuoka.or.jp

担当：みかん園芸部 野菜花卉課（TEL：054-284-9714）